

## 優秀修士論文概要

ハイデガーの「存在史的思索」における  
古代ギリシア哲学との対決

——形而上学の新たな生起のために——

小林 昌 平

本修士論文の目的は、ドイツの哲学者マルティン・ハイデガー（一八八九—一九七六年）が一九三六年からドイツ敗戦前後まで展開した「存在史的思索（Das seynsgeschichtliche Denken）」の中心的概念を明らかにすることである。すなわち、「存在（Seyn）」と「歴史（Geschichte）」の概念についてである。

「存在史的思索」はハイデガーが一九三六年に執筆し、半世紀以上を経た一九八九年に出版されたテキスト『哲学への寄与（エアアイグニスより）』を端緒として展開された。このテキストでは、この思索の全体像が構造的に描かれている。そこでは、形而上学の歴史が理解してきた「存在者の存在」から距離をとり、それを〈読み替え〉ることによって、存在者として現れつつ自身を隠す「存在（Seyn）」の概念が見出される。この「存在（Seyn）」概念によって、将来における歴史の新たな次元が根拠づけられ、展開されるのである。第一章では、その全体像を、個々の議論にも触れつつ概観した。「存在史的思索」は「予韻（Anklang）」「投げ渡し（Zuspiel）」「跳躍（Sprung）」「根拠定立（Grundung）」「将-来的な者たち（die Zukünftigen）」「最後の神（der letzte Gott）」の六つの「接合肢（Fügung）」から構成される「接合体（Gefüge）」という構造をとる。

「予韻」においては、現代における「存在忘却（Seinsvergessenheit）」と、それを根拠づける歴史のうちでの「存在遺棄（Seynsverlassenheit）」が明らかになる。

「投げ渡し」においては、この「存在遺棄」がいかに成立したのかが明らかになる。古代ギリシアから現代までに至る「形而上学」の歴史において、存在は「存在者の存在（Sein）」として、すなわち存在者に基づいてのみ把握されてきた。そのとき、それ自体としてみられるべき「存在（Seyn）」は必然的に看過されてしまふのである。この事態を存在の動性として捉え返したものが、存在が人間を見捨てる「存在遺棄」という事態である。同時に、こうして存在者を見捨て拒む存在そのものを明らかにする場、つまり「存在の真理」の開けが西洋形而上学の歴史を通じて欠落していたことが明らかになる。

「跳躍」においては、以上の「形而上学」の歴史の前提を成していた事柄、すなわち存在者の存在に対する優位から、存在（Seyn）に基づく存在者の再興という試みの展望が描かれる。それにしたがえば、存在者ではなく存在こそが、存在者の可能性、現実性、必然性を自身のうちに統一しているという意味で優位性をもち、これに基づいて、存在者も理解し直さなければならぬ。

「根拠定立」においては、主に「現-存在（Dasein）」、「存在の真理（Wahrheit des Seyns）」そして「匿-（Bergung）」についての議論を概観した。「現存在」とは、「理性的動物」から転換することで可能になる、「存在（Seyn）」の歴史に基づき存在する」という人間の将来的な存在様態である。そのとき「現（Da）」とは、現存在を根拠づける、最も根源的な「存在の真理」の開けである。この開けとは、上述の、形而上学における理解を逃れる「存在（Seyn）」が現れつつ隠れる二重の動性をあらわにする場である。これをハイデガーは、古代ギリシアの「アレーティア

「*ἀνὰ πρῶτον*」すなわち「非秘蔵性」の（読み替え）に基づき「隠れのための明るゝ場（*Lichtung für das Sichverbergen*）」として規定する。人間は思索においてこの真理の開けを問いつつ根拠づけ、存在は、その開けにおいて、自身を拒みつつ人間を根拠づけている。この相互の根拠づけが「根拠定立」という事態である。これらのことに基づいて、この「存在の真理」を存在者のうちに見出し、規定する現存在の行いが「匿い」である。現存在は、存在の現れと隠れの二重の動性を存在者のうちに「世界」の開けと「大地」の閉鎖として見出し、それに基づいて存在者をあらたに規定し直すのである。

こうして規定される存在者との関わりは、形而上学である「はじめの原初（*der erste Anfang*）」を転換することによって、「もう一つの原初（*der andere Anfang*）」として展開される。「もう一つの原初」では、存在史的思索の知を持つ者たちを中心とした共同体が形成される。この者たちが「将来的な者たち」である。

加えて、この原初は人間の独力によって展開されるわけでは決してなく、過ぎ去る神との関係の中で展開される。存在者における大地の「隠れ」を根拠づけるものが、この過去に逃げ去って、今はおらず、将来において到来する、「最後の神」なのである。

第II章では、以上のような筋立てのもと展開されている「接合体」の「投げ渡し」に着目し、ハイデガーが形而上学における「存在（*Sein*）」の意味をいかに解釈し、それをいかに読み替えて、自身の「存在（*Sein*）」として練り上げたのかを明らかにした。その際ハイデガーが重要な対決相手とみなしているのはアリストテレスである。そこで、ハイデガーが一九三九年に執筆した「ピュシスの本質と概念について」（『道標』所収）を読解することで、ハイデガーが西洋形而上学の根源的な「存在」解釈とみなす「ピュシス」の概念と、それに基づく「存在（*Sein*）」の「本質化（*Wesung*）」

の概念を明らかにした。先行研究では、存在は時たま現れるが、存在者の基体として大抵は隠されている、ということが想定され、いわゆる否定神学的な「存在（*Sein*）」概念が前提されていることが多かった。これに対して、本論文では、現れると同時に、隠れる存在の二重の動性を明らかにした。すなわち、存在（*Sein*）は隠れが源泉として先立っているのではなく、その「現れ」があつてはじめて隠れも見えてとられる。それゆえ、現れと隠れは同時なのである。

第三章では、前節での「存在」の現れと隠れの動性に基づいて、存在史的思索それ自体がそれとして生起する「存在（*Sein*）」の「歴史」の概念を明らかにした。『存在と時間』において論じられた「歴史性」は、現存在が、既在性と将来、誕生と死の「あいだ」として、言い換えれば、過去と将来における「無性」によって限られることにより存在する、という事態のことである。『哲学への寄与』でも、この「歴史性」の形式に基づいて「歴史」は語られているが、そこで『存在と時間』の「無性」に相当するものは「存在（*Sein*）」の隠れとして再解釈されている。このことが意味するのは、歴史における一時代は、その時代における存在解釈に基づき、そこからしか歴史を語ることができない、という有限性を持つていくということである。この有限性に基づくならば、存在の歴史とは、「歴史の歴史」である。というのも、各時代の歴史の語りは、その時代の存在理解に基づくと考えられる。そうである以上、さらにその歴史の語りは、「存在の歴史」に基づいて、存在理解と共に、複数化されるのである。

ここから進んで、ハイデガーの存在史的思索に見出すことのできる「存在の歴史」のヴィジョンを明らかにした。以上の議論に基づけば、「存在の歴史」における哲学者たちは、各人がそれぞれ、歴史的な広がりを含め、「存在」理解に基づいて、世界全体を語り出している。この世界全体の開示は、それぞれがそれぞれの哲学の中で自然と歴史全体を根拠づけている

点で、互いに充足し、直接干渉し合うことのないまま両立している。そのうえでしかし、そうした諸哲学の存在理解が断絶しながら歴史の動性に基づいて互いに関係し合うことが可能になる次元が「存在の歴史」に他ならない。

優秀修士論文概要

## ジャック・デリダ『声と現象』研究

——時間とエクリチュールについて——

宗 利 風 也

### 序 論

本論文は、ジャック・デリダの『声と現象』の後半部（第5～7章）を読解することで、時間とエクリチュールの関係をフッサール現象学の枠組みの中で解明するものである。

『声と現象』の前半部（第1～4章）では、『論理学研究』における記号の2つの機能、すなわち意味を伝達する「指標作用」と意味を表示する「表現」について分析している。そこで問題となるのは、フッサールがどのようにして記号から指標作用を還元したのか、である。デリダによれば、この指標的な記号は（フッサールの意味での）再現前化の機能を有しているため、フッサールは、指標作用を還元するために、記号の再現前化の機能も還元しなければならない。この議論に続く第5章から、指標作用や再現前化の機能、すなわちデリダが「エクリチュール」と呼ぶものが還元不可能性が論じられるのだが、本論文はその理由を解明した。

ところで、『声と現象』の議論の背景には、フッサール以外の論者の影響（例えばハイデガーなど）がある。しかし本論では、『声と現象』がフッサール現象学の徹底化としての側面をもつということを示すために、徹底してフッサール現象学の枠組みの中で解釈することを試みた。しかし、『声と現象』においては非常に圧縮された議論が展開されているため、『声と現象』の分析だけからでは、そこで扱われている主題をフッサール現象学における様々な主題と対応させるのは困難である。そのため、本論では『声と現象』（1967年）以前に書かれたフッサール論——『フッサール哲学における発生の問題』（1953-54年）、『幾何学の起源』序説（1962年、以下「序説」と略記）等——や、同時期に書かれた著作——『グラマトロジーについて』（1967年）等——を参照しながら、デリダの用語をフッサールの概念構成の中で再定義した。

### 第1章 点的な今と二つの非－知覚

本章では、『声と現象』第5章「記号と瞬き」を分析することで、本論の目的の解明への足がかりとして、デリダが把持と再現前化が区別不可能になる場として「現在」という時間を設定していることを明らかにした。

『声と現象』第5章においてデリダは、『内的時間意識の現象学についての講義』を集中的に読解しながらフッサールの時間論を読み替えている。このとき議論の中心になるのは、把持と想起の区別である。把持と想起はそのどちらもが何らかの過去を意識することであるが、前者は知覚であり、後者は再現前化であるために、この2つはフッサール現象学において明確に区別される。これに対しデリダは、フッサールが「現在」を特権視していることから、把持と再現前化を非－知覚の二つの変様のあいだの差異

であると解釈する。本章は、デリダが解釈する「現在」という時間の構造を明らかにし、その解釈の射程について検討した。従来、それは把持と再現前化が区別不可能である、すなわちエクリチュールの還元が不可能であるという主張と解釈されてきたが、そのデリダがそのように主著する理由にまで踏み込んだものは少ない。本章では、この理由の解明が『声と現象』第6章で行われることを明らかにした。

## 第2章 判断と理念的な「記号」

本章では、『声と現象』第6章「沈黙を守る声」の前半部分を分析しながら、理念的対象の把握を可能にする自己-触発（自分が語るのを-聞く *s'entendre-parler*）の構造における「声」と記号の関係を、フッサール現象学の枠組みの中で再解釈した。

デリダは、自己-触発がコブラ (*être/sein*) の直接法現在三人称単数 (*est/ist*) の特権によって可能になっていると指摘しており、フッサールもこの特権を認めると考えている。そのため、まず、デリダの議論をフッサール現象学の用語で再定義するために、フッサールの『経験と判断』における「*S ist p*」という述語作用の分析を確認した。フッサールによれば、述語作用とは、基体 *S* と規定 *p* の潜在的な結びつき（受動的な総合）を現在において能動的に把握することである。次に、デリダの論じる「声」を、フッサールの述語作用の分析の中で再解釈した。デリダによれば、述語作用の理念的性を保つためには、現在において受動性から能動性への変換が行われる媒体が非経験的な媒体である必要がある。こうした非経験的な媒体をデリダは「声」と名付ける。またデリダは、この声が理念的な「記号」とであると主張している。この点を本論は、「序説」における記号の物的な側面と身体的な側面との区別に関する分析に基づきながら考察した。

## 第3章 理念の時間性

本章では、自己-触発の時間性がフッサールの生き生きした現在に基づいていることを明らかにした。

『声と現象』においてデリダは、声によって語られた意味は隔々まで時間的であり、また、声による「語り」<sup>パロール</sup>の時間性が非時間的ではない時間性をもつ、と述べている。『声と現象』は、この時間性の更なる理解のために、ハイデガーの「時間の自己-触発」概念への参照を促しているのだが、本章では、先の『声と現象』の記述と「序説」における時間性に関する分析を結びつけることで、声による「語り」の時間性においてもフッサールによる生き生きした現在の分析が下地にあることを明らかにした。

「序説」によれば、意味の時間性が全時間的であり、非時間的ではないという事態は、意味の理念的対象が、語られた結果として時間の中にありつつも、非実在物であり現実のどこにも存在していないために非／超時間性をもつという事態だと説明されている。デリダは、この全時間性と非／超時間性が「同時に」成立している点にジレンマを見出している。そして、「序説」においてデリダは、理念的対象を出現させる「思考」においても上述のジレンマが生じている、と分析している。その理由としてデリダが挙げるのは、「思考」は、無限に展開する非／超時間的な理念（カント的な意味での《理念》）を現前させ全時間的にするものであるという点である。ところで、「序説」においてデリダは、このジレンマの「根」が生き生きした現在における全時間性と非／超時間性をめぐるジレンマだと指摘している。こうした「序説」の議論を分析しながら、「思考」と声による「語り」との類似性を明らかにすることで、声による「語り」の「根」においても生き生きした現在における全時間性と非／超時間性をめぐるジレンマが生じていると解釈できることを示した。

#### 第4章 自己－触発と生き生きした現在

本章では、前章で見出した、声による「語り」に生じている、生き生きした現在における全時間性と非／超時間性をめぐるジレンマの内実を検討した。

『声と現象』においてデリダは、「語り」の時間性をハイデガーの「時間の自己－触発」概念を活用しながら説明しているが、本章では、デリダがこの概念を活用することで、フッサールによる生き生きした現在の分析の枠組みをフッサールのテキストを経由せずに示そうとした、ということを明らかにした。

まず、デリダが活用した「時間の自己－触発」概念の内実を示すために、1964-65年の講義（『ハイデガー 存在の問いと歴史』）におけるハイデガー読解を分析した。そこでデリダは、ハイデガーの次の分析に、すなわち、カントの「私は考える」は時間の構成に不可欠であるのだが、その「私は考える」は内世界的な時間性の中にはない時間性をもつという分析に着目している。そして、デリダによるフッサールの「生き生きした現在」についての分析を解説することで、デリダが「時間の自己－触発」概念と「生き生きした現在」において同じ事態が生じていると考えていることを明らかにした。フッサールは、時間が主体の時間性を超える地点であらかじめ受動的に構成されているため、能動的な主観性にとって〈言えないもの〉ないし〈経験できないもの〉となっていると分析している。『フッサール哲学における発生の問題』においてデリダは、このフッサールの分析に関して、受動的な非時間性は存在者化しない限り能動的に把握できないという点を強調している。デリダのハイデガー読解とフッサール読解におけるこのような類似を指摘することで、『声と現象』における自己－触発をフッサールの時間論の枠組みで解釈した。

#### 第5章 痕跡、隠喩、エクリチュール

本章では、第1章から第4章までの議論を踏まえて、フッサールがエクリチュールを還元できない理由を考察した。

まず、エクリチュールが還元できない理由を示すために、「痕跡」という概念について考察した。『ドラマトロジーについて』を分析すると、痕跡とは現在の非時間的な側面だと解釈できる。そのため、痕跡は記号に先立っているとデリダは考える。このことがエクリチュールが還元不可能である理由である。しかしデリダによれば、エクリチュールは、単に還元不可能なだけではなく、フッサール現象学に必要なものである。『声と現象』において、この点は、エクリチュールと直観の関係から論証されている。つまり、エクリチュールとしての言語活動も理念的対象も、直観が不在であっても成立しているため、それらは結びつくのである。

そして、本論文の結論として、デリダは、フッサール現象学において「エクリチュール」の次元が還元しえないことを示すことで、超越論的な「私」は経験的な「私」と区別できない「私」であるというテーゼを導入したことを示した。